

ふるさとの

# かたがりべ

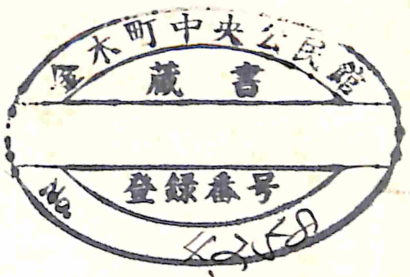
第一集



柿本人麻呂ゆかりの人丸神石

発行

嘉瀬ふるさとをさぐる会



# 表紙に寄せる人丸神石ゆかりの縁者としての記

板柳町在住の山中美津雄氏の祖父龍助氏が嘉瀬村清久溜池、人丸崎に、十三村より、王朝の歌詠人、歌聖といわれた柿本人麻呂ゆかりの人丸神石を運び来たり、水辺に岩木山の影を写し崎の一角に御堂を建てて安置。明治十二年春も弥生の候、人丸崎の御堂に県下の歌人を初め、遠くは伊豆の国、渡島の国からも、多数の和歌詠み人を集めて、人丸神石の入魂歌会を催した。この人丸神石が、人丸崎から姿を消したのは大正の末の頃。長男龍之助(元治元年一月二十六日生)は大正十二年三月十三日嘉瀬村二六八番地より金木へ転居。その頃龍之助は既に亡く、その妻タケ(天保十三年九月二十日生)は、亡夫が大事にし、神と敬った人丸神石を、代々山中家では敬神の念をもって継承してゆくことを、嫁イト(明治元年十月二十日生)に固く言い渡し、山中家では代々嫁が人丸神石の祭神を司どる習慣になっていた。

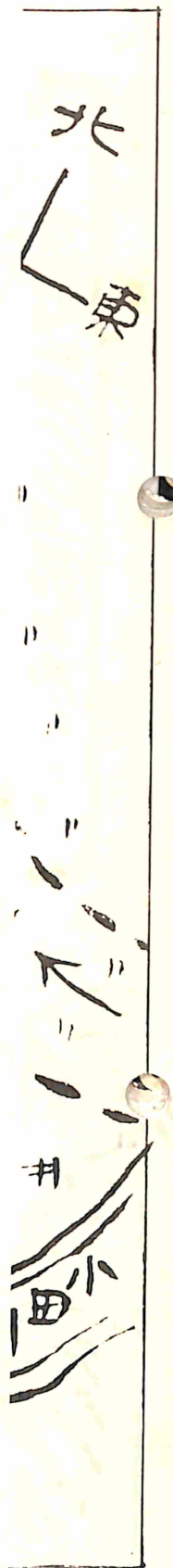
人丸崎と言われる雲雀野一〇七番地の松林は、明治二十七年山中兵一郎に所有権が移り、その後山中巻太郎を経て、大正九年に小松才八の所有となった移り変りで、龍之助が金木に移ってからは、小松家で時々人丸崎の神石に供物を供へ供養し祭っていたと言う。しかし、龍之助の妻タケは、先代の遺言でもある神石の祭りをするには、金木から人丸崎まで出向くのは、老年であり、身体の動きも大儀で司祭することができず、なんとか身近に安置し祭りたいと希い、長男龍一の妻であるイトに命じ、小松家と交渉了解を得て、大正十二年の夏、人丸崎から金木朝日山の家の裏庭に安置。人丸神石の祭りをタケから引継がれたといわれる。しかし、不運にも覺職をしていた夫の龍一が三十五才の若さで亡くなり、その後また転居しなければならなくなって、転去したものの、イトは月に一度は神石にお参りを欠かさず司祭にあたった。大東亜戦後、イトは一時時田の実家に身を寄せ、その頃もイトは時田から三、五キロの道を歩いてお参りを欠かしなかったが、息子喜美雄(東北電力勤務)の勤めの関係で各地を転動して歩く事情から、勤務地が金木から遠くなり、遠くになるに従って人丸神石へのお参りも遠ざかるようになった。

イトは明治十二年に龍助が全国の歌人を招き詠まれた歌や俳句の短冊数十枚、巻物一巻、人麻呂像の懸軸を大事に保存、これは山中家の家宝であり、人丸神石と離ればなれにしてはならないと言い直し、昭和五十一年三月この世を去った。

金木で菓子店を営む伏見喜久夫氏が金木に来て、菓子店を開いたのは昭和四十年。伝え聞くところによれば裏庭の石は神石と云われているが、その由来もわからず、埋もれるようになっていた大石の処置に困っていた。伏見家では不運が続くので、よく当たるといわれる『カミサマ』にうかがいを立てたら『石が哭いている』『石が元の土地に還りたがっている』と告げられたという。

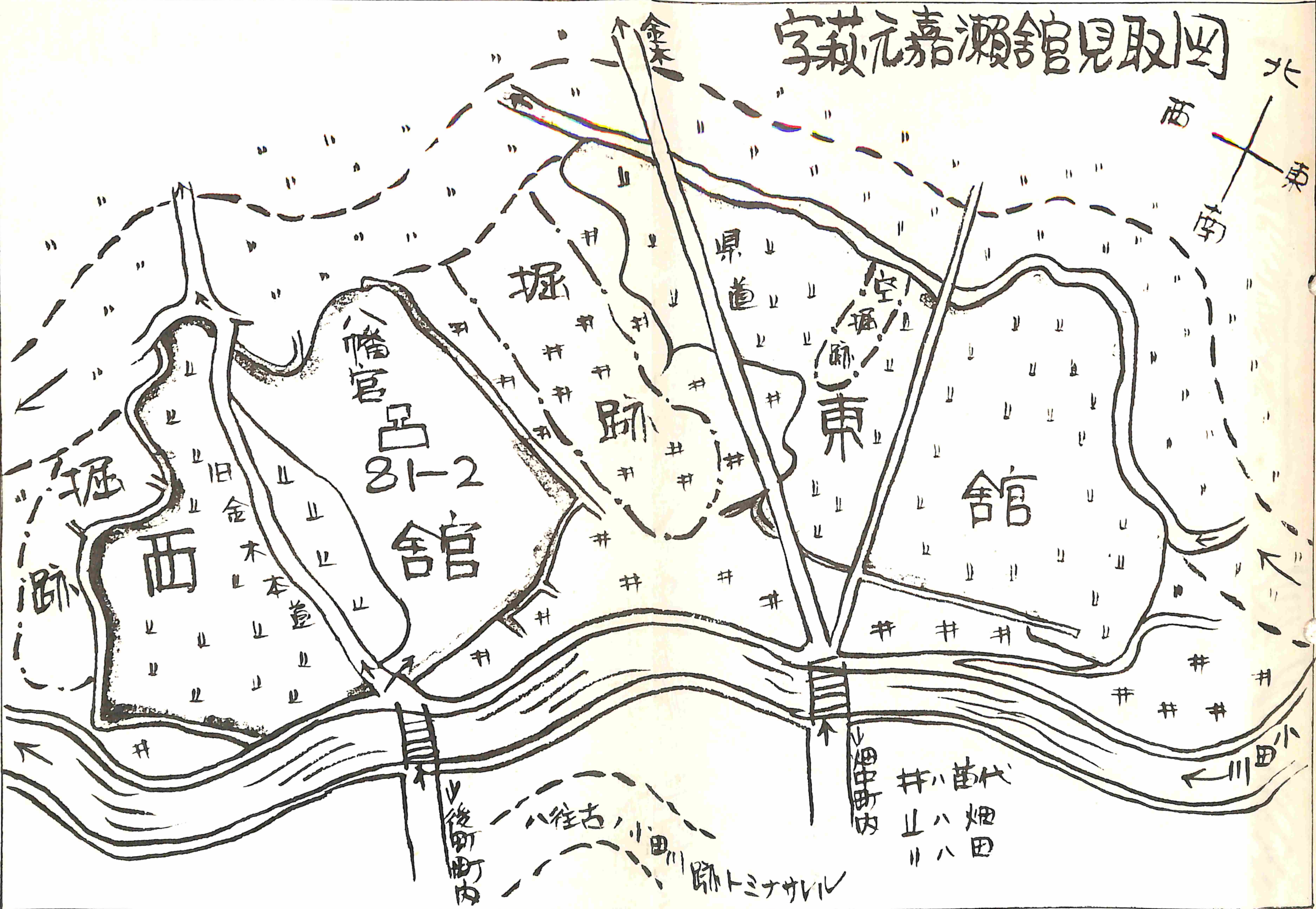
たまたま『嘉瀬ふるさとをさぐる会』では、郷土の姿を描きおこし次の世代に伝い継ぐべきと、調査の対象としてとりあげられたのが、清久溜池の人丸崎にあった大石であった。そして、金木の朝日町にある人丸石を嘉瀬に安置すべきだと機運が盛り上がり、山中美津雄氏の了解をとりつけ、昭和五十三年四月嘉瀬八幡宮境内に遷座した。

私は、嘉瀬人丸崎にまつわる、柿本人麻呂ゆかりの神石と伝承されてきた。神石にかかわる山中喜美雄氏の縁者の一人として、安住の地を得た人丸神石の『ふるさと神』『教育の神』として、永久に崇められることを願う者である。(山中 操)



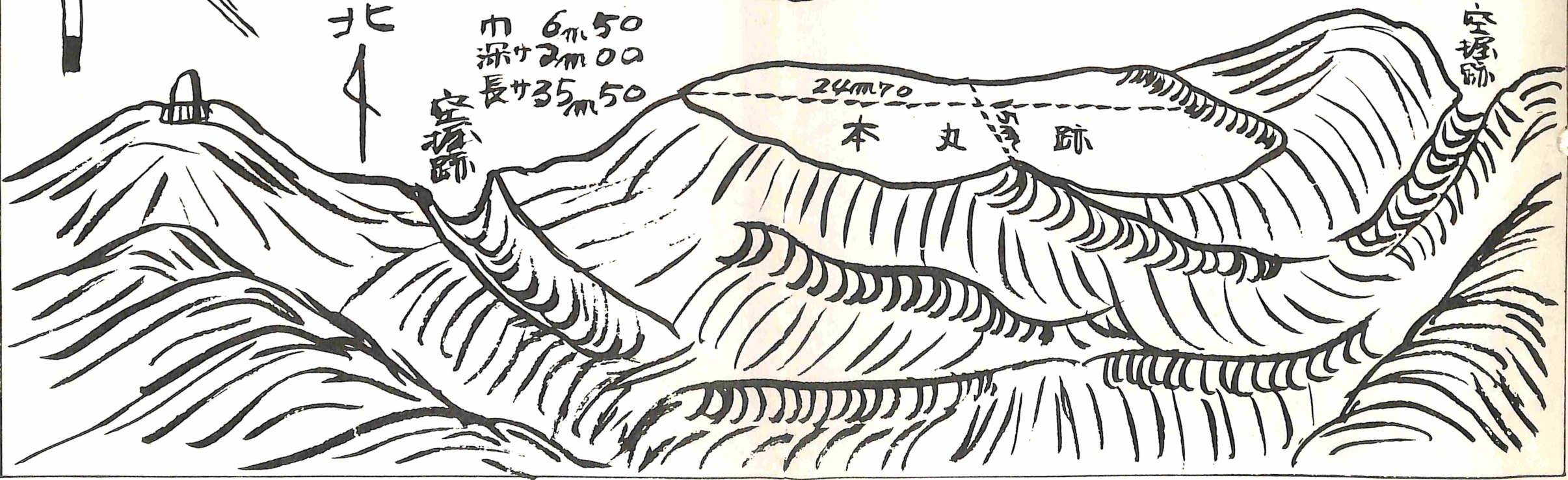
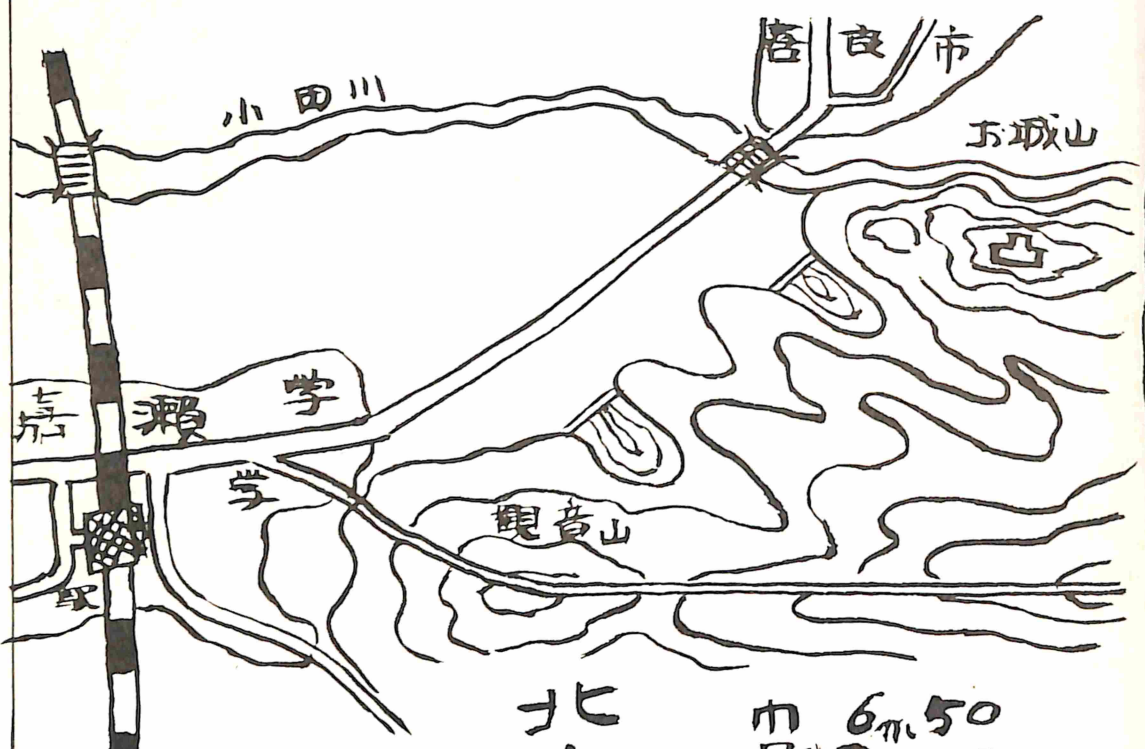


# 四取見館瀬嘉元菰字





# 加勢城踏査圖





# 目 次

題 字 金木町蒔田 書道師範 吉田清作書  
 表紙に寄せる人丸神石ゆかりの縁者としての記 山 中 操  
 折込みグラビア 字萩元嘉瀬館見取図・加勢城踏査図

ふるさとをさぐる会の歩み …………… 木 下 巽…… (2)  
 文化財保存について …………… 金木町長 田 中 豊 藏…… (4)  
 松 風 の 跡 …………… 金木町教育長 中 谷 金四郎…… (4)  
 地 方 文 化 …………… 金木町議会議長 秋 元 武 治…… (5)  
 発刊にあたって …………… 嘉瀬ふるさとをさぐる会 前会長 山 中 正 津…… (5)

|| 随 想 || 先人の遺産を大事に … 須 崎 正 敏…(6) 『津軽の子守唄』から … 沢 田 薫… (9)  
 語り聞き …………… 秋 元 惣 之 進…(7) 遺 蹟 …………… 木 立 久 二…(10)  
 奴踊りと逸子踊り …… 小山内嘉一郎…(8)

『いごぐ穴』と天明飢饉 …………… 木 村 治 利……(12)  
 中柏木部落成立と氏族構成の研究 …………… 原 田 万 治……(46)  
 嘉 瀬 今 昔 …………… 木 立 民五郎……(50)  
 柿本人麻呂と『伊呂波歌』 …………… 外 崎 三 千 男……(60)  
 嘉瀬八幡宮考察 …………… (20)  
 道 …………… (34)  
 上方見物紀行録 …………… (26)  
 むかしかたりっこ …………… (56)

歴 史 ポ ッ ト	妙光庵・古い墓石 …………… (10)	踏 査 記 録	二ツ森丸石断層 …………… (11)
	享和十三年の村落・賽の河原地蔵導堂由来 (19)		なぞの組み石 …………… (25)
	頼母子帳 …………… (19)		天明飢饉の惨状 …………… (33)
	明誓庵由緒語り …………… (24)		槍の穂先か …………… (33)
	譲渡書 …………… (32)		一口メモ …………… (32)(44)(54)
工藤次左衛門様御知行所地・頼母子講請書 …… (55)	昔のワッパク仕事 …………… (45)		
津軽藩凶作年次 …………… (59)	祖先の信仰 …………… (45)		
			史蹟標木・赤鉛筆・会員名簿





# 『ふるさとをさぐる会』の歩み

木下 巽

昭和五十二年四月、会の発足と共に、事務局を三年間担当した。会の運営にあたって、会員相互の交流を中心にしながら、会を郷土史研究団体として軌道にのせることに専念する。

- 三年間の研究実績として、次のことをあげることができる。
- (1) 人丸神石移転折衝と、遷座式典挙行。
  - (2) フィールドワークによる遺跡、神社仏閣めぐりと合宿研究。
  - (3) 定例集会による「村の歴史」の基礎研究。
  - (4) 標木設立の計画立案づくり。
- 幸いに山中会長の誠実さと、各会員のご協力によって『ふるさとをさぐる会』の土台みたいなものが、この三年間の研究によってできたものと、共に確認したい。

次に、会の当初以来の歩みを記録し、今後の参考資料としたい。

- 52・2・10 嘉瀬小学校百周年記念誌『嘉小百年史』が発行される。
- 52・4・10 嘉小百年史編集委員有志で会発足のための準備会。
- 52・4・14 ふるさとをさぐる会への参加を回覧板にて呼びかける。
- ◎昭和五十二年の研究
- 52・4・28 組織会に十四名参加（規約、会費、事業、役員決定、初代会長山中正津、事務局長木下巽がなる。）
- 52・5・1 人丸神石遷座計画、八幡宮氏子総代と懇談、金木町伏見宅訪問了解を得る。役場内にて具体的日程の検討。
- 52・5・2 人丸神石移転を七日に決定、通知書配布。
- 52・5・4 人丸神石は板柳町山中喜美雄氏の個人所有物と判明。
- 52・5・6 山中喜美雄氏へ電話で移転了解を得る。

- 52・5・7 八幡宮集会。基礎づくり、板柳町山中宅へ直接訪問。諸事情により『人丸神石』移転計画延期にする。
- 52・5・14 木立久二、木下巽の両名再度山中宅へ訪問確認する。
- 52・5・28 人丸神石の経過報告と対策、嘉瀬十年の語原の研究。
- 52・6・25 嘉瀬旧道、おしろ山の实地研究。
- 52・6・28 旧道、おしろ山の研究と今後のとりくみ。
- 52・7・28 夏季村内フィールド・ワーク立案研究。
- 52・7・30 八幡宮再興の棟札の研究。
- 52・8・20 村内神社めぐりとその研究。
- 52・8・27 村内遺跡めぐりとその研究実施。
- 52・9・10 嘉瀬旧道めぐりとその研究実施。
- 52・9・17 村内の寺、墓めぐりとその研究実施。
- 52・12・28 村内めぐりの研究反省。佐野氏の資料研究。
- 53・1・14 嘉瀬八幡宮の研究、新年親睦会。
- 53・2・27 板柳町山中氏より電話にて、人丸神石移転了解連絡。
- 53・3・5 理事会。人丸神石移転計画の確認
- 53・3・27 町教委事務局打合せ。教育長に報告。伏見宅へ訪問了解。移転の具体的計画と予算について全会員確認。
- 53・4・15 山中氏来訪。金木伏見宅へ会員集会。大橋勇五郎氏によって、人丸神石移転に先立って、大袈式挙行。
- 53・4・16 人丸神石遷座式典案内状四十名に発送。
- 53・4・18 人丸神石、金木町より嘉瀬八幡宮境内に移転。工事完了。
- 53・4・21 八幡宮にて、式の打ち合せ。清掃、記念樹移植する。
- 53・4・22 『人丸神石遷座式典挙行』、祝宴。山中喜美雄氏、原田

県議、町長、教育長、町会議員、氏子総代全員、ふるさとをさぐる会全員が出席する。R A B T V取材、東奥日報にも報道される。

## ◎昭和五十三年の研究

- 53・5・13 五十三年度総会。会員二十名。
- 53・6・29 『人丸神石』石段工事計画、フィールドワーク計画
- 53・6・30 人丸神石まわりの整地作業（朝六時）
- 53・7・1 人丸神石の石段工事完了。
- 53・7・8 中柏木の『うもれ木』の实地研究。
- 53・8・6 津軽安東史蹟めぐり（フィールドワーク）。福島城跡・相内日吉神社・唐川城跡・十三寺院等。
- 53・8・20 理事会。（人丸神石由来板掲示計画）
- 53・9・6 由来板の案文づくりと設立計画。
- 53・9・9 外崎三千男氏由来板書き作業。
- 53・9・25 理事会（由来板設立日程と予算）
- 53・9・26 人丸神石由来板設置工事。同反省会。
- 53・10・27 弘前方面の实地踏査、慶弔内規を設ける。
- 53・11・28 嘉瀬城の实地踏査計画。人丸神石研究にピリオドを打つ。改めて村内の生いたちにかかわる場所に『標木』を設置することを企画する。(1)旧嘉瀬小学校跡・(2)各館跡・(3)嘉瀬城・(4)二ツ森・(5)イゴグ穴、その他
- 53・12・9 嘉瀬薬師神社の实地研究（土中の環状石について）
- 53・12・15 合宿研究の企画会。
- 53・12・28 フィールドワーク、合宿研究実施。
- 53・12・29 弘前景勝院、長勝寺、誓願寺、革秀寺、巖鬼神社、弘前観光ホテル宿泊研究（標木設置計画確認）十一名。
- 54・4・5 佐野氏提供の村調査誌の研究と今後の取り扱い。
- ◎昭和五十四年度の研究
- 54・4・21 五十四年度総会。会員二十一名

- 54・6・28 中央公民館依頼、研究計画と内容。標木設置計画。
- 54・7・8 オシロ实地踏査研究。
- 54・7・28 二ツ森の实地踏査研究。
- 54・8・11 イゴグ穴の確認と实地踏査研究（嘉瀬保食宮と金木）
- 54・8・17 村外フィールドワークと合宿研究。
- 54・8・18 北畠家墓所・浪岡城跡实地調査研究。
- 54・9・28 定例研究。フィールドワーク、实地踏査研究のまとめ。
- 54・11・29 須崎氏の提案により、管林署西嘉瀬山より丸太払い下げ申請することを確認。その運搬計画の具体化。オシロコ、タデコ、嘉瀬城の今後の研究。標木設置（観音様、嘉瀬の桃等も追加）、山中久美氏の『人丸神石の短歌木札設置の承認』
- 54・12・13 須崎氏が個人で丸太運搬の諸準備完了連絡。
- 54・12・16 西嘉瀬山より標木用の丸太運搬作業。積雪の中、沢に入り、約二メートル長さの丸太を運ぶ。川流し二・三百米。更に路上積み上げ作業。トラック積みとかなりきびしい運搬作業だった。それだけに会の財産ができたことと、標木設置の見通しがついた。午後慰労会。
- 54・12・28 フィールドワーク並びに合宿研究会（弘前市翠明荘）
- 54・12・29 弘前市高杉中別所『板碑』。同新町『誓願寺山門』同笹森町『東照宮』。藤崎町『板碑』の实地研究。
- 55・1・28 保食宮前の大木が伐倒されたことに関連して、村内の古木・銘木を語る。イゴグ穴の研究（昔は三反歩位の面積であったこと）。薬師神社のウモレ木。清久溜池等のことについて、佐野洪氏、木立民五郎氏より話題提供。
- 55・4・26 五十五年度総会。木下巽事務局長小泊小学校へ転勤のため、木下清一氏に事務局を引き継ぐ。（前事務局長）



## 文化財保存について

金木町長 田中豊藏

温故知新<sup>II</sup>ふるきを尋ね新しきを知る<sup>II</sup>という言葉もある通り、現在を見つめ、将来を見通すためには、どうしても過去のことを知らなければなりません。歴史の勉強や郷土史探求の意義もここに在る訳であります。

過去を知る最も基本的で重要なことは史蹟とか伝承記録を調べることであるということは私が今更申し上げるまでもありません。

金木町にも史蹟や記録等いわゆる文化財が沢山あり、そして、これから調査や説明をしなければならないものも数多くあるはずで、調査や説明の終わったもの、これから調査説明しなければならないものを問わず、郷土研究に重要と思われるものは手厚く保護し、後代に引き継いでゆくことは我々現代に生きる者の責務であると思います。

その意味で、「嘉瀬ふるさとを語る会」の存在意義は大きく、史蹟の調査、保存、民間伝承の記録の集録等、地道な活動を続けられていることに対しては、日頃から感服しております。

この度、数年にわたる会員皆様の熱意と努力の結晶とも言うべき研究成果を会誌にまとめて発表するという事になり、心からお祝いと敬意を表する次第であります。

私も行政担当者として、「嘉瀬ふるさとを語る会」に啓発された形ではあります。文化財保護というものの重要性を再認識し、文化財保護行政に力を尽してゆきたいと考えております。

## 松風の跡

金木町教育長 中谷金四郎

明治高等小学校之跡

明治高等小学校ハ明治二十六年五月、金木、嘉瀬、喜良市、武田ノ四ヶ村組合ノ創立スル所、当初金木尋常小学校ノ一部ヲ借りテ教室ニ充テシガ、同二十九年地を芦野ニトス、校舍ヲ此ニ建テタリ、爾後校運漸ク栄エ、生徒ノ来リ学ブモノ北ハ小泊、西ハ稲垣ノ諸村ニ及ブ。大正十四年三月組合ヲ解キ閉校スルマデ前後三十三年、卒業生ヲ出スコト八百名ヲ越エ、今ヤ其地金木公園ノ一部トナリ、松風空シク呻呼ノ声ヲ伝フルノミ、我等往時ヲ追想シテ感慨ニ堪ヘズ、相謀リテ碑を建テ、以テ母校ノ跡ヲ永遠ニセントス

昭和六年九月

陸前稲井阿部勇之丞刻

呻呼ノ声というのは、こどもらが、がやがや無邪気にさわぐ声の意で、金木の文化を語る以上必ず遭遇する明治校の象徴として面白いことばである。質的にも量的にも師範学校へ進む人が後を断たず、仄りに三部会の思い出を中心に、当時の教育の充実振りに敬意を表するものである。

また嘉瀬小学校を訪れて、思わず長嘆息するものに、歴代校長先生の写真掲額がある。企図には類例がないわけではないが、どこか非凡である。

不肖の母も嘉瀬出身で、初代校長猪股先生のことを話していたが、その感容におそれをなし、一日も学校へ行かなかつたそうである。したがって目に一丁字も知らなかつた。母から一度の手紙をもらったことがない。

## 地方文化

金木町議会議長 秋元武治

今日全国的に地方郷土芸能として脚光を浴びているものとして青森ねぶた、津軽三味線、津軽じょんから節などが挙げられる。

勇壮な太鼓や笛ではやしながら街を練り歩くねぶた。ある時は繊細華麗な音色、ある時は豪快奔放な旋律をもつて世界の音楽界の注目を浴びている津軽三味線、そしてその三味の音に合せて「お国自慢のじょんから節よ若衆歌つて主人のはやし、娘踊れば稲穂も踊る。」に代表される技巧的な節回しの唄として全国的にも有名になつた津軽じょんから節などは代表的な芸能であるが、我が金木町にも嘉瀬の奴踊り、

金木荒馬など有名な郷土芸能があり、特に嘉瀬の奴踊りは昭和四十五年に青森県文化財の指定を受け、又、金木荒馬も県無形文化財大会に数多く出演するなど貴重な存在となっている。

従来、文化というと中央から地方へ流れるような感が否めなかつたが、近年、テレビ、ラジオ等マスコミの普及や、交通網の発達による人的交流により、その格差がなくなり、逆に地方文化が中央へ流れるという現象さえ生じている現況である。

これらの現象は決して偶然ではなく、作家の太宰治、版画の棟方志功、直木賞の長部日出雄を始め、数多くの本県から輩出された先達の偉業があつたことと言うまでもないが、それにもまして、我々祖先が培かつて来た貴重な芸能文化を、永遠に絶やすことなく継承して行くことが我々に残された責務といえよう。

## 発刊にあたって

嘉瀬ふるさとを語る会 前会長 山中正津

いまの子供たちは、そのような呼び方を知らなくなつたでしょう。嘉瀬と金木の間を「カラジャゲ」と言つた。私は、集落と集落の間のことをそのように嘉瀬言葉(津軽弁の嘉瀬訛り)で言うのかと長い間思つていた。

戦後、農業関係の仕事をするようになってから「カラジャゲ」は『川境(カワザカイ)』であることがわかつた。即ち、嘉瀬と金木の間の川コである。現在、「嘉瀬の奴踊り」が有名になると共に小田川が嘉瀬と金木の間川コだということになっているが、本当は嘉瀬と金木の境界線である川が奴踊りの唄に残された川なのである。

嘉瀬<sup>II</sup>加瀬・嘉瀬・加勢・河瀬<sup>II</sup>カセはアイヌ語で広い丘という意味とも言われるし、また、嘉瀬の瀬は早くはげしい流れの意、勢にしてもひろくいきおいの意味に用いる文学である。清はよくすんだ水の意で、嘉は「よい(よし)」の意味であるし、加は「くわえる」である。嘉瀬の語原にも、いろいろな説があるが、いずれにせよ、当時開村した人々は、水辺に開いた自分たちの邑(むら)が勢いよく発展することを願ひ、村の名としたに違いありません。

このように、私たちの村のおいたちを探り、後世に伝えようということから発足した嘉瀬ふるさとを語る会は、昭和五十二年二月発行の『嘉小百年史』に収録できなかったものを今日会員の調査研究による記録を発刊することになつたものです。各位のご批評をお願いします。